



宮城・瑞巖寺境内遺跡

瑞巖寺

- | | |
|---------------|---------------------|
| 所在地 | 宮城県宮城郡松島町松島 |
| 調査期間 | 一九九二年（平4）六月～一九九三年七月 |
| 発掘機関 | 瑞巖寺博物館 |
| 調査担当者 | 後藤勝彦・新野一浩 |
| 遺跡の種類 | 寺院跡 |
| 遺跡の年代 | 一二世紀（？）～一七世紀初頭 |
| 遺跡及び木簡出土遺構の概要 | 7 |

現在觀光地として知られる松島は、もとは高野山と同様の性格を帶びた靈場であった。瑞巖寺境内遺跡はその松島の中心にある。南

方五〇〇mの雄島には板碑が多く建てられ、火葬骨が散らばる。一帯の地質は、第三期凝灰岩で非常に柔らかく、周辺に多くの洞窟が存在する。

遺跡は、北西から海に向かって延びる二つの丘陵に挟まれた旧海浜低地上にあ

り、三方を山に囲まれ、一方は松島湾に面する。標高は三~四mである。

調査は、瑞巌寺新博物館建設に伴うものである。東北歴史資料館県文化財保護課の協力を得、後藤勝彦氏の指導で瑞巌寺博物館が実施した。調査面積は、一七〇〇m²である。

遺物は、瓦、國產陶器、中國產陶磁器、土師質土器、木製品、石製品、金属製品、骨製品などがある。陶磁器類は一二世紀前半に遡るものもあるが、一四〇—一五世紀前半が中心になる。木製品の遺存は極めて良く、杯、皿、椀、箸、曲物、下駄、櫛、塔婆などがある。

瑞應寺は中世には臨済宗寺院であったが、その前身は天台宗寺院であつたと言われている。両寺院に関する文献は非常に少なく、成立時期が判然としないが、臨済宗寺院は一三世紀中頃に成立し、一四世紀に入り伽藍が完成したようである。池はⅡ期基壇の北縁に沿つてつくられ、基壇構築と同時か多少遅れて造営されたと推定される。凝灰岩礫で護岸しているが、部分的に切石を据えている。東西一五m、南北五mを検出し、深さは二m余になる。全体の規模は

調査区外に延びているため不明であるが形状は長方形になるものと思われる。

この池跡から一五四点の塔婆と十数点の木簡が出土した。塔婆に記されているのは梵字と梵字が表わす仏尊の名である。木簡の中には闘茶会に使用する札と考えられるものが二点ある。これら塔婆・木簡と伴出した陶器類は一五世紀後半のもので、池造営時期に遡る資料はない。

8 木簡の积文・内容

- | | | | |
|-----|-----------|------------|-----|
| (1) | 「 南無大日如来」 | (332)×26×4 | 051 |
| (2) | 「 大日如来」 | 344×26×3 | 051 |
| (3) | 「 南無阿弥陀仏」 | 332×32×2 | 051 |
| (4) | 「 南無大日如来」 | 271×20×4 | 033 |
| (5) | 「 南無阿彌陀」 | 328×34×2 | 033 |
| (6) | 「客」 | 50×20×3 | 022 |
| (7) | 「 」 | | |
| | 「四」 | | |

56×54×3 021

全点池跡埋土から出土した。(1)～(5)は塔婆、(6)(7)は闘茶札である。梵字は(1)(2)(4)が金剛界大日如来、(3)が阿弥陀如来、(5)が五輪

(空風火水地)を表わす。大日如来を記したものが全体の八五%を占める。頭に刻みを持つものがあるが、これは五輪塔を意識したものであろう。(6)は茶の種類を当てる時に用いる札である。(7)は着座を決める時に用いるものであろうか。この二点に類似したものに聞香札があるが、時代的にみて闘茶札と考えた。

調査は終了しておらず、今後資料数は増えるであろう。

9 関係文献

瑞巖寺博物館『瑞巖寺境内遺跡試掘調査概報』(一九九三年)

(新野一浩)

